

県育成白ニガウリ「熊本 VB04」の半促成作型における安定生産技術

半促成作型における「熊本 VB04」の生産向上技術として、①接ぎ木栽培により可販果収量が増加する。②株間 80cm で可販果収量は多く、大果生産ができる。③交配開始節位は 15 節以上とする。④交配頻度は週 4 回または 4 節おきとする。

農業研究センター農産園芸研究所野菜研究室 (担当者: 梶山幹司)

研究のねらい

果実が白く、既存の普及品種と同等の収量を確保できる白ニガウリ「熊本 VB04」の半促成作型における栽培特性を把握するとともに、安定生産を図るための条件を明らかにすることを目的とした。

研究の成果

1. 接ぎ木栽培は自根栽培に比べて、可販果の 1 果重は重く、収穫本数および収量は増加する (表 1)。
2. 株間については、可販果収量は $80\text{ cm} \approx 70\text{ cm} > 100\text{ cm}$ の順に多い。また、可販果 1 果重は $80\text{ cm} \approx 100\text{ cm} > 70\text{ cm}$ の順に重く推移する (図 1、図 2)。
3. 交配開始節位が 15 節は 20 節と同等の可販果収量を確保でき、販売金額は同等である (表 2、図 3)。
4. 交配頻度は、これまで目安としていた 4 節おき交配と比べると週 4 回における可販果収量および販売金額は同等である。交配開始 20 節では週 3 回は減少傾向にある (表 2、図 3)。

普及上の留意点

1. 「熊本 VB04」の品種特性は、農業の新しい技術 (No. 659) を参考とする。
2. カボチャ台木「新土佐 1 号」を供試し、接ぎ木方法は断根片葉落とし合わせ接ぎで、誘引方法はつる下ろし 3 本仕立て法による結果である。
3. 草勢が弱い場合は、交配開始節位については、20 節以上で適正な草勢になってから開始する。
4. 株間試験は、畦幅 250cm で栽植密度は株間 100cm が 40 株/a、80cm が 50 株/a、70cm が 57.1 株/a の結果である。

【具体的データ】

表 1 自根および接ぎ木における収量性

処理	可販果率 (%)	可販果 1果重 (g)	可販果 本数 (本)	可販果 収量 (kg/a)	可販果 収量指数
自根	96.9	283.7	2198	623.1	100
接ぎ木	98.0	307.5	2466	759.6	122

注 1) 収穫期間は、平成 24 年 4 月中旬～7 月下旬。

注 2) 可販果収量指数は自根を 100 とした場合の数字。

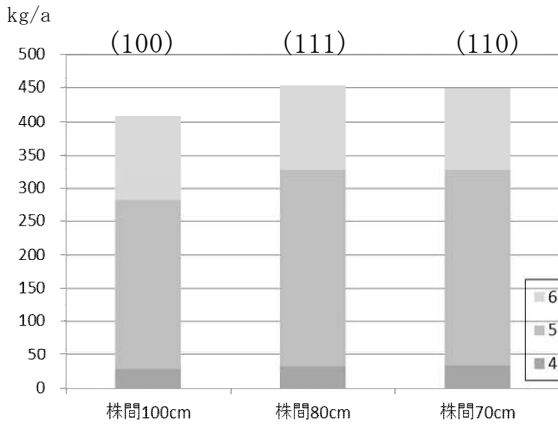


図 1 株間の違いと時期別可販果収量

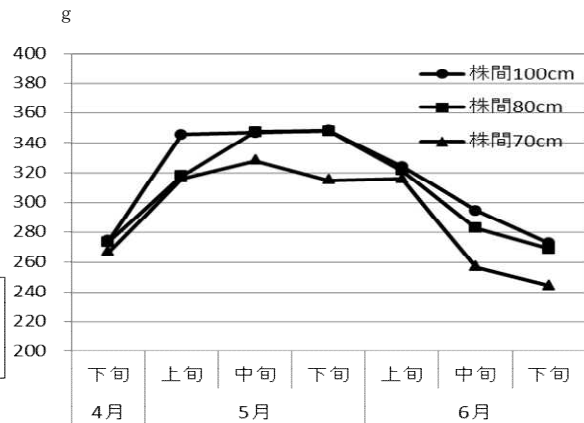


図 2 株間の違いと可販果 1 果重の推移

注) 栽植密度は、株間が 100cm (40 株/a)、80cm (50 株/a)、70cm (57.1 株/a)。接ぎ木栽培で収穫期間は平成 25 年 4 月下旬～6 月下旬

表 2 交配の開始節位および頻度の違いと可販果収量

交配開始節位	交配頻度	可販果収量 (kg)
15節～	週3回	720.0
	週4回	719.8
	4節おき	747.0
20節～	週3回	693.8
	週4回	761.5
	4節おき	761.4

注 1) 栽植密度は 52.6 株/a、接ぎ木栽培、収穫期間は 4 月中旬～7 月下旬。

注 2) 可販果収量については、多重比較 Tukey 法により 5% 水準で有意差なし。

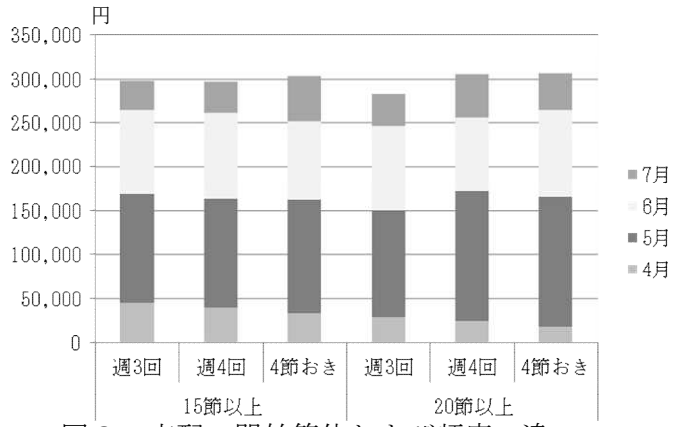


図 3 交配の開始節位および頻度の違いと販売金額

注) 販売金額については、平成 23 年～25 年の 3 年分の共販実績より算出した。